

機関番号：10101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520183

研究課題名（和文） 比較文学の視点による英雄叙事詩の研究

研究課題名（英文） Heroic Poetry in Comparative Perspective

研究代表者

寺田 龍男（TERADA TATSUO）

北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：30197800

研究成果の概要（和文）：英雄叙事詩は軍記物語と同様、口承文化と文字文化の接点で成立し、かつ伝承されたジャンルである。そこで本研究は西洋文学研究の立場からこの現状を考察し、英雄叙事詩と軍記物語を包括する上位概念として「叙事詩」に代わる新しい術語を用いることを提起した。また英雄叙事詩『ヴィルギナル』におけるいくつかの語彙・表現を主要3写本で比較し、ドイツの研究者が刊行を準備している新たな校訂版の作業に貢献することができた。

研究成果の概要（英文）：Just like Japanese gunki-monogatari, heroic poetry in medieval Europe (especially in Germany) is a genre that was created and disseminated on the border between oral and literary culture. With a focus on the German counterpart, this project proposes that Japanologists use a generic term for both rather than "epic". Three articles which have compared vocabulary in the three important versions of the middle high German epic "Virginal" have contributed to the work of German scholars preparing a new edition of this text.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2007年度 | 1,400,000 | 420,000 | 1,820,000 |
| 2008年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 2009年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2010年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：独文学、日本文学、比較文学、英雄叙事詩、軍記物語

1. 研究開始当初の背景

(1) 数々の独創的・先駆的研究で知られるヨアヒム・ブムケが提唱した「叙事詩のオリジナル複数説」が、ゲルマニスティクの枠を超えて、世界的に影響を及ぼすようになった。その最初の事例研究が「英雄叙事詩」に属する『ニーベルンゲンの哀歌』だったことから、このジャンルに対する関心もいっそう高まり、研究も盛んになった。当初は「オリジナルはひとつ」とみなす既成概念を根底から覆す説として注目されたが、やがてこれを例証するこ

とも反駁することも困難な状況となり現在に至っている。さらに、作品の構成原理の解明や中世文学全体におけるこのジャンルの位置づけ、受容（者）の位相など、明らかにされるべき課題は今なお多い。一方日本では軍記物語の成立や書記伝承、さらに口承文芸とのかかわりの研究が盛んであり大きな蓄積がある。そうした様々な成果を提示することは十分可能であり、とくに作品とこれを生み出した社会との関連という視点から議論に貢献することに大きな意義があると考え

たのである。

(2) 一方、歴史学者ゲルト・アルトホフらが提起した「紛争解決のルール」の研究が、近年文学研究者の関心呼びつつあった。(日本でも服部良久などを中心に研究が活発化している。) 私見では英雄叙事詩の諸作品にその「ルール」を読み解く鍵が数多く含まれているが、その研究が進んでいるとはいえない。

(3) その英雄叙事詩の一ジャンルである「ディートリヒ叙事詩」の研究が世界中で大きく進展している。とくにブレーメン大のエリーザベト・リーナートを中心とするグループが新たな校訂版を出版し始めた。これにより、従来は信頼度の低い校訂版しかないため未解決のまま残されてきた諸問題の解決と研究の飛躍的発展が期待される。申請者は従来からこの分野を研究していたので、作品と実社会の関連という視点からさまざまな語彙の分析を進めることで貢献ができると考えた次第である。

2. 研究の目的

本研究の眼目は多面性を持つ英雄叙事詩の総合的研究である。同時に、東西社会における文芸の独自性と普遍性の両面に光を当て、独創的な研究成果を世界に発信することを目指すものである。

(1) 異なるジャンルを比較する場合、その意義を説明する必要がある。そこで本企画では日本でもよく用いられる「叙事詩」の用法を検討し、従来とかく曖昧に使用されていた術語の意味を明らかにした上で、包括的概念の使用を提起することを目的とした。

(2) さらに「文学」と「歴史」という古くて新しい課題を整理し、日本と西洋で大きく異なる研究者の姿勢にあらためて光を当て、問題解決の基盤をつくることも目的とした。

(3) 「オリジナル」が複数あったかどうかの分析には異なる系統・版の包括的な比較が必須の作業である。そこで口承文化と文字文化にかかわる文芸作品をできるだけ広く考察し、東西のジャンルで比較することを目指した。さらに具体的に、同じ作品の異なる系統・版の間での語彙の綿密な比較を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 欧米起源である「叙事詩」の概念を整理検討し、軍記物語についてこの述語を用いることの妥当性を考察する。従来の研究では、既成概念の壁によって進捗の可能性をみずから閉ざしていると考えられる点が少なくなかったといわなくてはならない。その最大のもの、既存の学問分野、すなわち「文学」と「歴史学」を隔てる壁であろう。歴史学者がいう(文芸作品は)「虚構」であるという論

はたしかに正しい。しかし古文書など歴史学者が用いる史料が往々にして事実を点的にしか表わさず、したがって点と点をつなぐ作業が容易ではないのに対し、少なくとも日本では、軍記物語をはじめ豊富に残されている文芸作品に史料としての性格が認められていることは多くの歴史学者が『平家物語』や『太平記』の記述を引用していることから明らかである。ヨーロッパの場合もこれと同じであると断じることはむろんでできないが、文芸作品が社会の実態と無縁に成立したと想定するのは却って不自然である。そこで比較(対比)の基礎的作業の一環として、文芸作品に史料としての側面を見出す例を探索し、海外の研究者にも説得力ある比較理論を構築する。そのためには中世日本における文芸活動や軍記物語研究の最新動向を紹介する努力をする。軍記物語に関しては『平家物語享受史年表』

(三省堂)などで中世における受容史が詳細に知られているのに比べ、ドイツ語圏では文芸活動の実態を推測させる史料がきわめて少ないので、日本側の研究成果を応用する意義は大きいといえる。逆に英雄叙事詩の場合は、個々の作品について想定される「オリジナル」の成立時期と現存最古の写本の筆写時期がしばしば20~30年程度しか隔たっていないのに対し、『平家物語』ではその隔たりがおおよそ200年におよび、日本側で不明な点が多いため逆方向の応用に将来性を見出すこともできる。したがって今回の申請研究でも作品の成立と写本の伝承過程の比較考察に重点の一つを置く。

(2) 申請者が従来行ってきた研究では、社会における主従関係の破綻と回復のパターンを古文書と文芸作品によって総合的に記述するという課題を中心にすえてきた。そこで今回は、中世ドイツ文学の中で紛争がもっとも詳細に描かれているディートリヒ叙事詩を素材として、世界的に関心を集めるコンフリクト研究の成果を検証し、文芸作品ならではの展開も明らかにする。これにより、武力を一元的に管理する権力主体が存在しなかった時代に東西社会で共通だった人間行動のダイナミズムを明らかにする。

(3) 東西の文芸作品や記録文書から、英雄叙事詩と軍記物語の書記伝承および口頭伝承にかかわる表現・記述を集めて比較し、その類似点・共通点および相違点を比較検討する。本研究ではまずディートリヒ叙事詩『ヴィルギナル』の主要3写本の語彙とモチーフを比較検討する。

4. 研究成果

(1) 「オリジナル複数説」・概念規定・比較の意義について

①今回の助成研究ではオリジナル複数説を考察する基礎作業に重点を置いた。オリジナルが複数であるか否かを見極めるためには、テキスト諸系統そのものの比較検討がもっとも重要であることは論を俟たないが、この点についてはすでにふれたようにドイツ語圏を中心とする西洋でも現在議論が行き詰まっている感がある。そこで申請者は視点を換え、一見無関係と思われかねない方法論を用いた。それは受容の諸相の検討である。口承文化と文字文化が会って作品が成立する時（およびそれらの影響下において作品が伝承される時）、識字力を持つ人物と語り芸の関係を無視することはできない。日本では、とくに『平家物語』の成立・伝承に関して、口承芸の「琵琶法師」と文字文化を持つ「僧侶・宮廷人」というように役割を峻別する傾向が見られる。おそらくそこに大きな誤りはないであろうが、ヨーロッパの場合、とくに英雄叙事詩に関しては、識字力を持つ作者自身が同時に口頭伝承の担い手であったとする仮説が有力である。これを証明することは現在困難であるが、キリスト教の聖職者が「ミサで聴衆の関心を惹きつけるため英雄の名を口にしなければならぬ」という愚痴をこぼしたという記録が複数残っている事実から、同じ時代の日本の状況との対比が可能であることを東西の複数の例で示した。さらにこれらの例は無名の人物ではなく、経歴が比較的明らかな人たちによるものであるため、今後さらなる進展が期待される。

②大津雄一・日下力らの論があらためて示したように、軍記物語に関しては「叙事詩」という述語を用いるべきではない。生田弘治が導入した「叙事詩」の概念は当時（1906年）としては画期的であったろうが、概念が一人歩きした事実は否めない。その理由として一例を挙げると、今日中世ドイツ文学でもっとも知られる作品のひとつである『ニーベルングンの歌』の本格的な翻訳や研究論文は、中島悠爾の書誌研究によると、日本では1930年代以前に遡ることができないのである。それにもかかわらず「叙事詩的」等の形容辞が用いられることはまだ多い。そこで『ニーベルングンの歌』や「ディートリヒ叙事詩」が、ヨーロッパの英雄叙事詩の歴史にどのように位置づけられるかを考察した上で、今なお引用され続けるイギリスの研究者モリス・パウラの論を詳細に検討した。パウラの論が小西甚一の『日本文学史』（英訳あり）を通して全世界に大きな影響を及ぼしていると考えられるからである。該博な知識に支えられたパウラではあるが、彼の論には問題が多い。ホメロスの『イリアス』『オデッセイア』を至高の作品とみなしてはばかりらず、他のあら

ゆる時代・あらゆる文化圏の諸作品をこれらと比べて評価まで行っているのである。しかし注目すべきは、パウラが軍記物語をそもそも英雄叙事詩とはみなしてはいない点であろう。アイヌ民族の英雄物語には何度も言及していることから、パウラが『平家物語』等の存在を知っていたことは間違いあるまい。ただ、彼はそれを英雄叙事詩とはみなさなかった。それはなぜか。いくつか考えられる理由のもっとも大きなものは史実性の高さであろう。軍記物語をはじめとする東アジアの「いくさ物語」（日下）は、史実に密着して作られる。したがって出来事の起きた年月日と場所・登場人物の名前や年齢に官位までが詳細に記される。この点だけを見ると、英雄叙事詩と軍記物語の間には本質的な相違があり、比較（ないし対比）の対象とすべきではないという意見が出るのも無理からぬものがある。しかし見方を変えれば、どちらのジャンルもそれぞれの社会的文化的背景をもっており、私たちが今知る形態以外での成立と伝承はありえなかったというべきである。すなわち、仮にひとりの英雄的人物の活躍が口承で語られているとして、これを文字文芸化しようとするならば、ヨーロッパでは出来事の具体的な年月日と場所・人物の年齢などは出る余地がなかった。逆に日本ではそれなしには文芸たりえなかったと考えられるのである。こうした相違ゆえ、日下が述べたように軍記物語は英語ではwar chronicleと表現されるべきかもしれない。（しかし中世ドイツの年代記の中には「史書を書いた者すべての意図は勇敢な男たちの偉業を記すことであった」と冒頭で宣言する作品もあることを指摘しておく。）様々な相違にもかかわらず両者の比較・対比は豊かな実りをもたらす可能性が十分あり、英雄叙事詩と軍記物語を包括する概念（たとえば「英雄文芸」）を用いることを提起した。

(2) 「オリジナル複数説」の検証にはさらなる考察が必要であり、今後もその作業を進めてゆく所存である。また「コンフリクト」をはじめ当時の社会の実態を英雄叙事詩の諸作品・諸系統で確認・把握する作業、および作品や諸本の独自性を抽出する作業は、当初の予想を上回る時間と労力を要する課題であることが明らかになった。しかしこれらの点に関する重要な場面描写や語彙は数々確認されたので、これも順を追って公表し、日本文学・日本史学との対比を展開する所存である。

(3) ディートリヒ叙事詩『ヴィルギナル』（13世紀成立）に関して遂行した研究の結果を以下に略述する。

①『ヴィルギナル』には、いずれも15世紀に書かれた主要3写本がある（V10・V11・V12）。これらの写本の刊行本を用い、まず「戦

士」に関する語彙の比較を行った。理由は、戦争・戦闘をライトモチーフとする作品においてはこの語野が大きな意味を持ち、作品の構成原理を直接間接に証明すると考えられるからである。具体的には作品 1000 行当たり当該語が何回の頻度で出現するかを調査した。その結果、helt, degen, recke, wigant, ritter の語彙分布と付加される形容辞（語彙）は各写本でそれぞれに固有の傾向があることが明らかになった。写本間の影響関係は現在のところ証明されていないので推測するしかないが、この理由を写本筆者、ないしはむしろ写本の製作依頼者の嗜好の反映と見ることが妥当と思われる。特筆すべきは、もっとも古態とされる wigant の語が V12 版では高い頻度で用いられている点である。V12 は集合写本に掲載されているので同写本の他作品を調査した結果、複数の作品で同じ傾向を確認することができた。この点は今後さらに調査検討を進めて発表する予定である。

②『ヴィルギナル』に戦士の敵対者として登場する「異教徒」「竜」「巨人」および（敵対者ではない）「侏儒」に関して上記①と同じ方法で語彙の分布・形容辞（語彙）の付加傾向を調査した。その結果は戦士の場合以上に各作品の個性が強く、単に作品間の影響関係を論じるのが困難なばかりでなく、先に挙げた写本筆者ないし製作依頼者の強い個性が明らかになったといえる。頻度だけを見ると「誰と戦うか」に意が向けられている印象を受けるが、比較的短い場面に集中的に現れる場合がある一方、平均的頻度は高いものの作品全体で一様に用いられるため重要度が高いかが不明な語もあり、今後も継続して研究する必要がある。

③最後に『ヴィルギナル』に用いられた「悦楽境」のモチーフについて、それが出現する V10・V12 間の比較を試みた。理由は、『ヴィルギナル』においては他の英雄叙事詩諸作品とは比較にならない頻度で現れるからである。両写本では最初の 200 詩節余りで類似点が比較的多く見られ、このモチーフも多くがその部分に見られる。しかしその後はきわめて稀になることから、結果的に古い世代（フーゴ・クーン等）の成立に関する仮説を補強することとなった。この仮説は現在では研究史の一コマと片づけられるきらいがあるが、再検証する意義はあるであろう。なおこうした「いくさ」とは本来無縁なはずのモチーフは、クルツィウスが指摘したようにヨーロッパ文芸では長い伝統がある。日本の軍記物語に「桃源郷」の諸要素（語彙等）を探索する試みが有意義かどうかを判断することはできないが、ヨーロッパでは通説化しつつある説、すなわち「英雄物語の語りのパターンは（ウェルギリウス等の古典と並ん

で）聖者伝説にも依拠している」ことを考えると、方法論に関してもささやかな成果を上げることができたと申したい。

その他のテーマ、すなわち英雄叙事詩が成立した当時の実社会との関連をうかがわせる表現については数多く収集することができたものの、発表に至らせることはできなかった。できるだけ速い時期に成果として公表する所存である。

(4) 下記論文の機関リポジトリにおける平成 23 年 5 月 1 日現在のダウンロード数は以下の通りである。論文①98 回（リポジトリ公開 2010 年 12 月）、②149 回（同 2010 年 7 月）、③217 回（同 2010 年 4 月）、④501 回（同 2009 年 12 月）、⑤432 回（2008 年 8 月）である。なお『ヴィルギナル』の新たな校訂版を準備しているブレーメン大の研究グループから協力の申し入れを得たことを付記する。研究と並行して「ディートリヒの歴史叙事詩」3 部作の翻訳を目指したが、遺憾ながら完了には至らなかったので今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

- ①寺田龍男、Der Wortschatz bei >Virginal< – Versionen (V10), (V11) und (V12) – Teil 3: Topoi、メディア・コミュニケーション研究 59 号、77–94、2010 年、査読有
URI: <http://hdl.handle.net/2115/44398>
- ②寺田龍男、Der Wortschatz bei >Virginal< – Versionen (V10), (V11) und (V12) – Teil 2: Heiden und außer- sowie übernatürliche Wesen、メディア・コミュニケーション研究 58 号、137–152、2010 年、査読有
URI: <http://hdl.handle.net/2115/44813>
- ③寺田龍男、Der Wortschatz bei >Virginal< – Versionen (V10), (V11) und (V12) – Teil 2: Kriegerbezeichnungen、独語独文学研究年報 36 号、62–79、2009 年（2010 年刊行）、査読有
URI: <http://hdl.handle.net/2115/44810>
- ④寺田龍男、軍記物語と英雄叙事詩（5）— 概念規定の諸問題—、メディア・コミュニケーション研究 57 号、35–54、2009 年、査読有
URI: <http://hdl.handle.net/2115/40057>
- ⑤寺田龍男、軍記物語と英雄叙事詩（4）— 享受史の一側面—、メディア・コミュニケーション研究 54 号、1–17、2008 年、査読無
URI: <http://hdl.handle.net/2115/34565>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

寺田 龍男 (TERADA TATSUO)
北海道大学・大学院メディア・コミュニ
ケーション研究院・教授
研究者番号：30197800

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし